

10月総評

西駄 かづよし

風葬を言葉は全て蝶となる

長谷川栄香 宮城県

「風葬を」という呼びかけは、全てのことばが蝶になる世界へと向けられたものだろうか。蝶は美しくも儚く見える。その呼びかけは、神無き世界の、神へと向けられたものだろうか。

かーてんの

裏で

ふくらむ秋の陽の

焦げたバターのようなしきさい

さいう 石川県

この書き手のまなざしに映るのは、日々のゆるやかな時間である。その時間の中でみずみずしくゆれることばたち。

同じ作者の作品に「ぺんぎんの／ひなを／ふたりで見つめれば／むごんに春のひだまり満ちる」、「かいじゅうの／ように／驟雨をなぎたおし／きみの待つ駅まで駆け抜ける」、「なのはなの新芽を／なでてゆくように／きみがはじめて下の名を呼ぶ」などがあるが、いずれも同様の印象を受ける。一見、行替えのため分かりにくいけれど、いずれも短歌の定型に収まっている。それを感じさせないのは、作者の力量だと思う。

檸檬ひんやり

私の影も

吉沢 美香 宮城県

私の影もひんやりするなら、そこは、冷たい水に自身を沈めるようなものだったのかもしれない。そこは、しづかな場所で、誰も訪れる事のない森の奥へと、自らを導いていくよ

うなものだったのかもしれない。そして作品に満ちる檸檬の静謐さ。  
短律が美しい効果をもたらしている。

秋の夜  
煙突のあるクリニック

日下部 友奏 群馬県

クリニックの煙突は、空調かボイラーのためのものだろうけれども、病院に煙突という組み合わせが不吉な印象をもたらすのは、それが火葬のイメージと重なるからだろう。そうした情景を見る語り手に、自身を重ね合わせてみる。ふだんは遠くにある死の溶け込んだような風景。そこに訪れる秋の夜。

秋風がときおり入るコンビニの  
お菓子の棚の前で見つかる

azusa 京都府

親はないしょで、禁じられていたお菓子を買おうとしていたのだろうか。それとも、こっそり家を抜け出してコンビニまで来ていたのだろうか。見つからってしまった時の気まずい感じが伝わって来る。

けれども作品からは、気まずさ以上に、見つけてもらったという安堵のほうが強く感じられる。それはときおり入る秋風のせいだろうか。

地下鉄の水買う打ち明けたいこと  
がある

森 榮太 東京都

打ち明け話をしに行くのに、地下鉄に乘ろうとしているところだろうか。緊張すると喉が渴いたりして、水が飲みたくなるけれども、そのこと自体は、日常のなかで何気なく繰り返される生理現象でしかない。当人にとて一大事である打ち明けたいことも、そんな何気ないものに支えられている。作品は、そうした日々のありようを鮮やかに表現している。

セイタカアワダチソウで  
雲を泡立てた  
絵画のような夕暮れが来た

うたた 岡山県

おかえりなさいという声にも似た風景。雲も、セイタカアワダチソウも、すべてが等価で。こんなにきれいな夕暮れはめったに見られないかもしれない。

同じ作者の作品に「ねむるとき／なにかに落ちて／ぼくたちは／うまれるまえのじかんを生きる」といったものがあるが、こちらにも惹かれる。

モーニングコール時雨の海を見て

神崎まい 群馬県

モーニングコールと時雨の海ということばだけで、語り手の状況がありありと読者に伝わる。なぜ、そのホテルまで行く必要があったのか。そこで何をしていたのかは読み手に委ねられる。読むと同時に、はかなさに包まれている自身に気付く。

母の咳静かになって星座の夜

金光 舞 埼玉県

母の咳が収まったという安堵と、息が止まった（静かになった）かもしれないという母の死のイメージが交錯する。数々の神話を有する星座の夜に包まれる母。おそらく、ここでの母は、傍らにいる母であると同時に、もう帰ってこない母もある。

桜咲くことがニュースになる国で  
光に重さなんてなかった

ムクロジ 群馬県

ひりひりとした気持ちをまっすぐに書けるのは、それだけで魅力的だと思う。説明や啓蒙を捨て去った気持ちというのは心地いい。ただ、気持ちを詠ったもののなかには、読んでいてこちらが恥ずかしくなるようなものもある。けれども、この作品がそうならないのは、自身への感傷や同情を排除しているからだろう。たとえば「光に重さなんてない」という一節。自身をつきはなすような言い切りがすがすがしい。

同じ作者の作品「全部嫌で寂しくて秋雨きれい」にも同様のことが言える。

蝉のない冬の木々にも心臓を  
つけてあげたら材質めいて

清水 大稔 兵庫県

「蝉のない」や「心臓をつける」といった表現は即物的で、それは最後の「材質めいて」という一節の伏線になっているのかもしれない。心臓という一見グロテスクなことばを使用しても、作品全体が乾いた印象におおわれているのは、ことばのひとつひとつを材料のように扱っているから。

作品からは、残酷にも見える風景のなかの、やさしさのようなものを感じることができる。